

Hirosaki  
MOCA  
Letter

vol.02  
TAKE FREE

# 弘前 れんが倉庫 通信

弘前れんが倉庫美術館を  
もっと楽しむフリーペーパー

## 特集：2020-21 H-MOCA 展覧会レビュー

昨日まであった日常がとつぜん失われる。世界が一変してしまう。  
大きな流れに抗えなくなって立ち止まるとき、  
わたしたちは定まりきらなくなった自身の足元を、どうしたら照らすことができるだろうか。  
その光りはきっと、日々を扶<sup>たす</sup>ぐように放たれ続ける情報の断片ではなく、  
わたしたちの身体を毎日包む衣服のような、色あざやかな時間のなかにこそある。  
昨日から今日、今日から明日へと、一日一日を大切に繋いでいく。  
その循環の先に、変わらず呼吸し続ける春が待っていると信じて。





開館1年目となった2020年度は、2つの展覧会を開催しました。  
 今回の特集では、青森県内の学芸員による展覧会レビューと  
 来館者・制作サポーターの感想をお届けします。

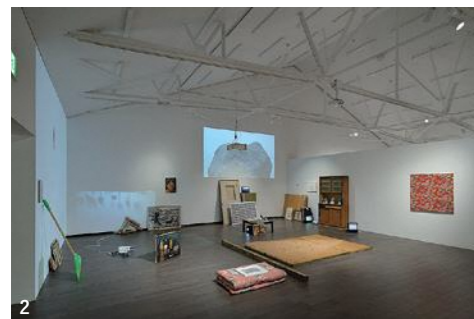
## クロノトポスの醸造術

慶野結香 青森公立大学 国際芸術センター青森 (ACAC) 学芸員

現代美術が「サイト・スペシフィック」と呼ばれる、場所の固有性を重視するようになって久しい。この場所でしか見られない、ここで見る意義のある作品や展覧会。青森市にあるアートセンターに勤めていても、この地に根づく文化に接触しようとする小一時間車を走らせ、弘前あたりまで来ることになる。そんな文化の息づく街、弘前に新しい美術館が誕生した。近代産業遺産として約100年の歴史を持ち、国内ではじめて大々的にシールドが造

られた煉瓦倉庫が、田根剛によって改修・整備され、美術館の建物自体がグローバル化する世界がもたらしてきた従来型の画一化や均質化に問いを投げかけるかのようである。

開館記念展覧会「Thank You Memory — 醸造から創造へ —」では、場所と建物の「記憶」に焦点が当てられた。出展作家の多くは、この場所と何らかの形で接触して新しい作品を生み出し、それらはそのまま美術館のコレクションとして収蔵されるという。最初の展示室



1. ナウイン・ラワンチャイクン《いのちへの手紙》2020年 弘前れんが倉庫美術館蔵 2. 潘逸舟《私の芸術が生まれた場所》2020年 作家蔵 3. 尹秀珍《ポータブル・シティ：弘前》2020年 撮影：畠山直哉

ナウインさんの《いのちへの手紙》は、昔のものと今のものを混ぜて描いていたり、色合いが「弘前！」という雰囲気、いのちにあげたらとても喜ぶだろうと思いました。

小学6年生

VOICE: 来館者の感想

ガラスの回る作品が心に残りました。なぜかという、ホースのところから風を送っていて、くるくるしているので、ぼくも回りたいと思いました。

小学3年生

開館記念 春夏プログラム

### Thank You Memory — 醸造から創造へ —

2020年6月1日(月) — 9月22日(火・祝)

尹秀珍、ジャン=ミシェル・オトニエル、笹本晃、畠山直哉、藤井光、奈良美智、ナウイン・ラワンチャイクン、潘逸舟 [弘前エクスチェンジ]

では、今あるこの場を準備した近代化の流れが、イメージのコラージュ、遺物のインスタレーション、年表により、現在からの応答として示される。畠山直哉の写真は美術館として転用される前の建物、藤井光の記録映像は建物に人の手が入っていく様子を写し、場所の変遷を知らせる装置としての役割を果たす。過去と現在のこの場所を想像力によってつなぎ、気配を増幅するインスタレーションを見せたのは笹本晃。ナウイン・ラワンチャイクンは、ここに生きる具体的な人々とその創造物を、ねぶたという記号を借りて掲げた。尹秀珍は古着を用いることで、布に残る記憶を都市と結びつける。弘前の風景の一部となっているりんごを象徴として用いたジャン=ミシェル・オトニエルは、この土地を宇宙へと結びつけていく。弘前に地縁を持つ潘逸舟と奈良美智は、前者は自らの芸術の根源をこの場所に求め、後者の《A to Z Memorial Dog》はここが美術館になるきっかけとなった出来事を記念するものとして、すでに多くの人々の記憶と結びついている。

かつてロシアの文芸評論家ミハイル・バフチンは、文学において時間と空間が融合した相関関係を「クロノトポス」と呼んだ。今回の作品の多くは、記憶のテーマの下に時間と切り離し難いものとして実際の場所を具体的に提示する。このあり方は、発酵作用を利用して素材を保存性の高い物質に変容させる、人間の知恵としての醸造にも似ているだろう。作品は見る者それぞれの記憶と重なり、そのクロノトポスを拡張し続けていく。

## さよならだけが人生ならばめぐりあう日は何だろう

工藤健志 青森県立美術館 学芸員

2013年に第1作が発表された小沢剛の「帰って来た」シリーズ。僕はこれまで2015年に資生堂ギャラリーで《帰って来たペインターF》を、2016年のさいたまトリエンナーレで《帰って来たJ.L.》を、2017年の横浜トリエンナーレで《帰って来たK.T.O.》を見ている。ペインターFこと藤田嗣治、J.L.ことジョン・レノン、K.T.O.こと岡倉天心の生涯から、アジアとの関係性を小沢独自の土着的視点でとらえ直し、文化も表現領域も異なるアジア各地の様々なクリエイターとの協働によってその人物像を翻案、拡張し、虚実が縋り交ぜとなった新しい物語を提示するインスタレーションである。絵画、映像、音楽という各要素の統合により成立する作品はまさに演劇的とも言えるだろう。固定化した「偉人伝」を解きほぐし、過ぎ去った過去から現代を生きる我々と直結する社会的アクチュアリティを導き出していく「帰って来た」シリーズ。本展ではこの3作に、第1作の野口英世をモチーフとした《帰って来たDr. N》(日本/福島とガーナが舞台)、さらに弘前生まれの寺山修司を取り上げた新作《帰って来たS.T.》を加えたシリーズ全5作品が一堂に公開されている。ホワイトキューブとは対極にある元倉庫ならではの固有性を持つ有機的空間に、「近代」「アジア」という自らのアイデンティティに深く根差した作品を追求してきた小沢剛という作家の特質が融合し、これまで以上に本シリーズのテーマやコンセプトが明確に伝わる展示となっていたように思う。

本展の目玉はやはり美術館とのコミッションワークである《帰って来たS.T.》であろう。小沢は、寺山率いる「演劇実験室◎天井棧敷」のイラン公演(1973年、1976年)という出来事を媒介として弘前とイランという遠く離れ



1.《帰って来たS.T.》2020年 弘前れんが倉庫美術館蔵 2.《帰って来たS.T.》(部分)2020年 弘前れんが倉庫美術館蔵 3.《帰って来たJ.L.》2016年 作家蔵 4.《帰って来たペインターF》2015年 森美術館蔵 5.「円卓会議の部屋 - 帰って来た人たちのアーカイブと百年 -」展示風景 撮影：楠瀬友将 (1、3、4、5)

た2つの地域を共振させ、斬新な寺山像を編んでいく。イラン在住の画家、ミュージシャンと、弘前在住の人形ねぶた組師、津軽三味線奏者による地域、領域を横断したコラボは、イラン国内の政情不安や世界規模のコロナ禍で難航を極めたというが、制作条件の悪化がむしろ地域、領域横断型の協働から生じる「偶発性」をさらに高めているように感じられ、作品が設置された空間に身を浸した時、柔軟な思考の回路がより開かれていくかのようにあった。同時に、グローバルな視点を持ちつつ、日本/東北というローカルな風土に深く根を張った寺山の活動と、小沢の創作態度の相似性も浮かび上がってくる。かつて寺山は「市

開館記念 秋冬プログラム

### 小沢剛展 オールリターン

一百年たった帰っておいで 百年たてばその意味わかる  
 2020年10月10日(土) — 2021年3月21日(日)

街劇」という形式をもって演劇の概念そのものを解体したが、絵画、映像、空間装置を複合化させた、まるで「見世物の復権」を主張するかのような本シリーズにおいて小沢は、ローカルに軸足を置いたグローバリズム、協働による他者性の積極的導入、芸術的儀礼性などを強く打ち出し、(アートを含めた)欧米中心の価値観を軽やかに乗り越えていくのだ。

PICK UP!

### 3Dアーカイブを公開中!

3Dで撮影された展示空間をウェブで鑑賞することができる「3Dアーカイブ」を公開しています。自由に視点を変えられるので、まるで実際に展覧会を巡っているように楽しむことができます。当館ウェブサイトの各展覧会ページをご覧ください。



3Dアーカイブはこちらからどうぞ

※小沢剛展の3Dアーカイブは現在制作中です。

生まれ変わったれんが倉庫内には、小沢さんの作品に表現された著名人たちの生きた証、それらと共鳴して、エネルギーがじゃわめいで居るようでした。ココで出会った方々と、場を創り出す・想いを表現する体験は、次のステップの自分へ活かしていきたいです。

VOICE: 制作サポーターの感想

他の参加者と、和紙を切って骨組みを留めてと作業するのが楽しく、仕事とは別の人間関係も新鮮でした。展示も、少しでも制作に関わったと思うと視点が変わるような気がします。良い経験ができました。



PICK UP!  
PEOPLE

美術館とまちをつなぐ  
わたし・アート・まち

## 木工作家・彫刻家 山根大典の猫の彫刻

ao+水玉 代表 千葉 綾子さん



夫と二人で雑貨店を開いて8年目になります。  
オープンしたての頃は、店のスタイルはこれでいいのだろうかど不安を抱いていました。そんな中、出会ったのが、京都の山根大典さんと彼の作品でした。

2015年、東京でのクラフト市「もみじ市」でのこと。山根さんのブースで、作品にふれてすっかり魅了されたんです。山根さんは、海や湖、山で拾った流木などを素材にして作品を制作しています。素材そのものから見えてくる“かたち”を生かして、動物や人物像を作り上げます。猫をモチーフとした作品が多く、当店にも飾っています(上写真)。

この感動を誰かに伝えたいと思い、もみじ市から1年後、当店で猫をモチーフにしたオブジェなどの作品展「cat展」を全国の作家さんに参加いただいて開催しました。



多くの方が来てくださり、「良かった」という声をいただきました。頭のなかで難しく考えるよりも、ちゃんと見せたいものがあって、思いをもっていると相手にも伝わるんだと実感。その時、店の方向性が見えたように思いました。“もの”には何かの力があるんですね。それはアートでも本でも。山根さんの作品は、大切な出会いとなりました。(談)



撮影・成田写真事務所

【ao+水玉】アオトミズタマ  
弘前れんが倉庫美術館のすぐ近くにある雑貨店。普段使いの食器やアクセサリ、衣類、雑貨などがていねいに並べられている。ときおり企画展も開催。弘前市住吉町8 TEL0172-55-9962

## Topic トピック

### 青森5館連携プロジェクト

青森県内の5つの美術館・アートセンターが連携し、青森のアートの魅力を国内外に発信する「5館連携プロジェクト」が始まっています。詳しくは下記、公式サイトをご覧ください。 <https://aomorigokan.com/>



### 弘前れんが倉庫美術館

[開館時間] 9:00~17:00 ※但し、金曜日・土曜日に限りスタジオ、ライブラリーのみ21:00まで開館  
[休館日] 火曜日(祝日の場合は翌日に振替)、年末年始  
〒036-8188 青森県弘前市吉野町2-1 [TEL] 0172-32-8950 [Mail] info@hirosaki-moca.jp  
[駐車場] 思いやり駐車場2台 ※お車で越しの際は近隣の有料駐車場をご利用ください

[表紙写真] 撮影：畠山直哉 (上) 尹秀珍《ウェボン》2003-2007年 作家蔵 (下) 笹本晃《スピリッツの3乗》2020年 弘前れんが倉庫美術館蔵  
[編集協力] ものの芽舎 [デザイン] デザイン工房エスパス [印刷] 凸版メディア株式会社  
[編集・発行] 弘前れんが倉庫美術館(指定管理者 運営業務担当 エヌ・アンド・エー株式会社) [発行日] 2021年2月1日

STAFF  
VOICE

美術館のおしごとアレコレ  
スタッフに聞きました!

## 弘前れんが倉庫美術館 Members #02

運営チーム 引田 幹生



美術館のライブラリーの本棚には、展覧会関連作家の本や地元の出出版物がジャンルごとに整理され、わかりやすく並べられています。この陳列を行っているのが運営チームの引田幹生さん。かつて大手書店で長年勤めていた経験もあり、本への思いはひとしお。棚の中にフレームを設置し、これ!という本をピックアップするなど、手に取ってもらいやすくなるためのアイデアが光ります。また、カフェショップと連携してミュージアムグッズの企画提案も行っていますが、様々な商品の中で、やっぱり「本」には思い入れがあるのだとか。

このほか、美術館の活動を支援してもらう「H-MOCAメンバーズ」の窓口も担当しています。「弘前の方にとって、美術館が身近な存在になってほしい」と話す引田さん。弘前出身であることや、穏やかで親しみやすい人柄も相まって、徐々に美術館ファンを増やしています。

聞き手・佐藤あい佳(タウン誌編集者) 撮影・成田写真事務所

## Exhibition information 展覧会情報

春夏プログラム「りんご宇宙 — Apple Cycle / Cosmic Seed」  
会期：2021年4月10日(土)~8月29日(日)

秋冬プログラム「りんご前線 — Hirosaki Encounters」(仮)  
会期：2021年9月18日(土)~2022年1月30日(日)〈予定〉

## Event report イベント報告

弘前エクステンジ #02 寺山修司  
トーク「誰か故郷を想はざる —  
なぜ寺山修司は弘前生まれと  
書かなかったのか」  
実施日：2020年12月5日



文筆家・世良啓さんをホストに迎え、弘前市出身のルポルタージュ作家・鎌田慧さんらと共に寺山修司と生誕地弘前の隠された謎について濃いトークが交わされました。2部構成で行われた当イベントの途中には音楽家・鎌田紳爾さんによるミニコンサートが行われる場面も。後半は現代美術作家・小沢剛さんもリモートで登場し、ジャーナリスト・齊藤光政さんらと寺山の母・はつと基地の関係という新たな視点での寺山考察が繰り広げられました。

HIROSAKI  
MUSEUM OF CONTEMPORARY  
ART